

13 日目 大湫-6.9Km-細久手-11.4Km-御嵩-4.5Km-伏見-8.1Km-太田

7 月 30 日、午前 6 時始発の近鉄に乗り名古屋経由中央本線 JR 釜戸駅へ、近くのコンビニでお握りを買ひ、タクシーで前回の到達点である大湫(おおくて)宿に到着したのは 10 時過ぎ、天候は晴れ予報は最高 36 度。

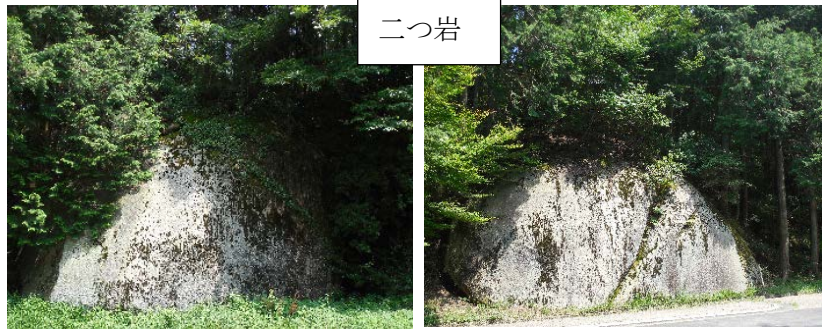
二つ岩

大湫宿から暫らく歩くと大きな岩が二つあり、「道の左に立てる大きな石二つあり。一つは烏帽子岩という高さ三丈(約 9m)ばかり巾は三丈に余れる。また、母衣岩という高さはひとしけれども巾は是に倍せり。いずれもその岩の形は似て石のひまひま松その外の草木は生いける。まことの目に驚かす見ものなり。大田南畝の壬戌紀行より」との大田南畝(蜀山人)の文章が石碑に刻まれている。現在では木に覆われて大きさも形も定かではないが、大きな石である

ことは分かる。ここまで書いて、「石と岩」の違いが気になり、ネットで調べた。

「一度動いた／手を加えたことがあるものは

石、動いた形跡のないものは岩」また「有用なものは石、そのままじゃ使いようがないものは岩」ともある。大田南畝の文章は、全体としては岩で、その岩の部分特定する場合は石と書いているように思うが、現代と江戸時代では定義が違うのかもしれない。



琵琶峠

「琵琶峠東登り口」の石碑があり、山間の石畳道となる。ここは日本で最も長い約 730m の石畳道で、峠の標高は 585m、大湫宿自体標高 510m なのでさほどの高さではない。平たい石の乾いた石畳は歩きやすく、山間の緑のトンネルは気持ち良いが蚊の多いのには閉口する。

特に竹林があると蚊の密度が高くなり、両手で顔の前を払いながら歩くことになる。

峠頂上の馬頭観音と歌碑



頂上には馬頭観音と和宮の歌碑があり、見晴らしは全く無し。

和宮の歌は実感がある。

住み馴れし 都路出でて けふいくひ
いそぐもつらき 東路のたび」

琵琶峠の石畳道



犬の訓練所

「琵琶峠西登り口」の碑があって、琵琶峠を越えたことが分かるが、まだまだ山道、ただその山道が広くなり、簡易舗装となり、自動車道となる。



国際犬訓練所

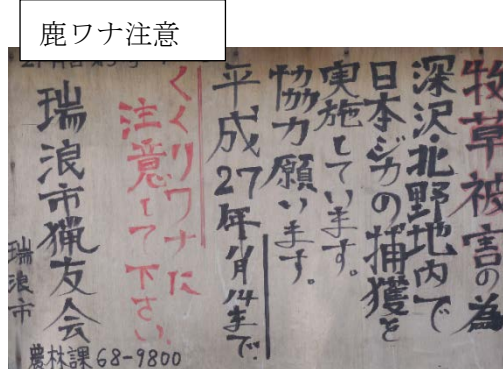
大きな木造の家が遠くから見え、近寄ると犬の鳴き声が出て、その建物の前に塀で囲んだ広い運動場のようなものがあり、建物には「国際犬訓練所」と書いてある。その家の前に差し掛かると、更に何匹もの大型犬特有の低音の「吠え」声が聞こえ、姿は見えないものの迫力がある。建物の前を通り過ぎると吠え声はピタリと消えた。

弁財天の池と鹿ワナ

水草のある小さな池があり、その池の中に小さな島があって社があり、石造りのミニチュアみたいな橋もあって、看板には「弁財天の池」と書いてある。大田南畝(蜀山人)の壬戌紀行には「左の方に小さき池あり。杜若ひしげり。池の中に弁財天の宮あり」と書かれているようで、カキツバタやジュンサイの自生地とのこと。既に太陽は高く、気温も上がっている。この池に水を流す為の竹樋があり、手を浸すと冷たいので、かねて用意の「マジクール」をその水に浸し、首に巻き、首の後ろ側の体温を下げ、熱中症対策をする。ロマンチックな雰囲気のある池のそばにあったのは、無粋な鹿ワナの注意板。鹿の「くくりワナ」とはどんなものか気になるが、取り敢えず道から外れないようにしよう。



弁財天の池



鹿ワナ注意

細久手宿 48番目

小さな集落が現れ、説明板があり、細久手(ほそくて)宿に到着。47番目の大湫(おおくて)宿と字は異なるものの、発音は同じ「くて」、気になってネットで調べたところ、「谷間の湿地帯」の意味だそうで、山間の集落全てに当てはまる気がする。大湫も小さな集落だったが、旧家が多く、宿場の雰囲気は濃かった。しかし、細久手は更に小さく、中心部がなく、遺構は殆ど残っておらず、一軒だけ大きな旧家がある。



旅籠 大黒屋

1859年(安政6年)の建築の旅籠で今も旅館を営んでいる。その旅籠の前でお婆さんが昼寝をしていたが、カメラを向けると目を覚まし、居ても良いか、と言われてしまった。一軒の民家に妙なオブジェを飾っており、最初は何か分からなかったが、枯木か木の根っこが材料らしい。

ある家
オブジェの



店、食堂、自動販売機はなく、公共交通機関もない宿の外れの木陰にて釜戸のコンビニで買ったお握りで昼食。

猪現わる

次の宿場までは11Km、山また山を越えていると、右手の藪で何か動物の騒ぐ音、ブーブーと鳴く声も聞こえたので猪と思い、身構えていたら、10m程先に猪の子(中型日本犬サイズ)が犬みたいにワンワン吠えながら現れ、写真を撮る間もなく、左の藪にはいっていった。ひょっとしたら親猪が現れるかもと想像し、手頃なサイズの枝を拾い注意しながら歩いていくと、なんと「熊出没注意」の看板。しかもその絵の熊はいかにも噛み付きそうな怖い顔、熊よりも猪の方がマシか。或いは我が家の守り神の猪様が熊

熊出没注意のポスター



を追っ払ってくれたのか、結局、蛇を見たくらいでその後は何も出ず。真夏のウィークデーであり、集落で村人を見る以外に会う人はいないが、中山道を京方面から歩いている旅人と出会い、挨拶を交わし、早速、ホットな猪出現情報を伝える。少し興奮していたかもしれない。

石室の野仏

細久手宿の外れの昼食は、「穴観音」の近くだった。上州・信州・木曾・美濃と野仏を沢山見てきたが殆ど野ざらし状態、しかしこの界隈の野仏は「穴」と言うか「窟」と言うか、石室の中に入れてあるものが多い。



細久手の穴観音、別名九万九千日観音、縁日にお参りすると九万九千日の功德が頂ける

秋葉坂の三尊石窟、



無名の野仏



屋根の雪止め

滑り止め瓦



屋根の雪が滑り落ちるのを防ぐ為に、屋根に金具をつけてあるのを見かけることはあるがこの地方では滑り止めのある瓦を使用しており、初めてお目にかかる形。

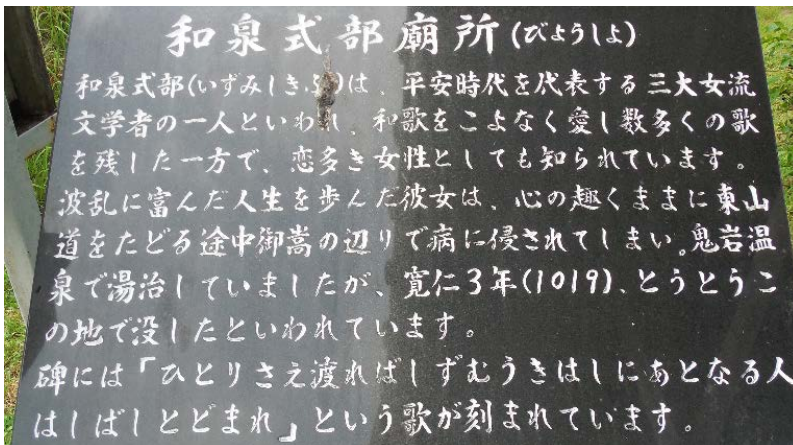
牛の鼻欠け坂

東海道の日坂(にっさか)と似た急坂となり、「荷物を背に登ってくる牛の鼻がすれて欠けてしまう程の急な上り坂」と説明版に書かれている、但し江戸からは下りで、全く問題無し。この急坂を下ると、やっと山岳部を抜けて道は平坦となり、畑・たんぼ・市街地と続き、次の宿場となる。



和泉式部廟所

宿場の入り口に和泉式部の墓があり、美人と評判の女性にゆかりのものを見逃すわけにはいかない。歌が刻まれていると言う石碑は、石が摩耗しておりどれか分からなかった。百人一首では「あらざらむ この世の外の 思ひ出に 今ひとたびの 逢ふこともがな」、ネットで調べると和泉式部の供養塔は全国に四十カ所以上あるそうで、人気がある。



和泉式部廟所の碑



御嶽宿 49 番目

御嶽(みたけ)は、本陣・脇本陣は残っていないものの、旧家が沢山あり、犬矢来の見事な商家竹屋を無料で公開していたので見学、中庭の奥にある離れ(茶室?)が良かった。



多くの家の前に行灯を吊り下げており、その行灯に書かれた絵が楽しい。



鬼の首塚と子規の歌碑

鬼の首塚と書いたノボリがはためいていたので寄り道、伝説によれば、「鎌倉時代、鬼岩の岩窟に關の太郎とも鬼の太郎とも呼ばれた男がいたが、悪行三昧のし放題。ついに蟹薬師の祭礼の日に討ち取られたのだが、首を京都に送る途中、この地に落ちて動かなくなってしまったためここへ埋めた」。又、首桶を縛っていた縄が切れたことから、この地名は「桶縄手」。首塚の横にあるのが子規の歌碑「草枕むすぶまもなき うたたねの ゆめおどろかす 野路の夕立」でこの地を通りかかった時に詠んだもの。



因みに、御嶽宿の中に願興寺と言う大きな寺があり、別名可見太師、或いは蟹薬師と呼ばれている。行政的には可見郡御嵩町。

伏見宿 50 番目

伏見宿は、1694 年に新設された宿場で、宿場機能はあまり発展せず、1848 年の大火で焼失した本陣は再建されなかったとのことで宿場の遺構は何も残っておらず、子規の句碑があるのみ。

「すげ笠の 生国名のれ ほととぎす」を見て、寅さんの「手前、生国と発しまするは、葛飾柴又・・・」を思い出した。



地図の誤り

愛用している地図の一つは「google 中山道地図」、その地図に従って歩き、地図上の橋が見つからず、30 分以上回り道をしてしまい、木曾川を渡り大田宿(美濃加茂市)についたのは 18 時半、そのままホテルに直行。 本日の歩数は 5.3 万歩。

赤線は地図上の中山道、その位置に橋は無い。黒点線が現実の道



マンホールの蓋

細久手はマンホール無し、御嶽は町の木のアカマツ。

伏見(可児郡御嵩町)は町の花のサツキ。

御嶽



伏見



13日目

